

高齢社会における 「人と動物の関係学」の展開と課題



ヤマザキ動物看護大学 動物看護学部 特任教授
横浜国立大学 名誉教授

安藤 孝敏

1 はじめに

近年、犬や猫などの動物が私たちと共に生活するようになり、そのような動物に対する呼び方も、「ペット」から「コンパニオン・アニマル (companion animal)」へと変化してきている。この変化は、私たちと動物との物理的ならびに心理的距離が近づいてきたことを反映したものである。動物と長い時間、密接にかかわることによって得られる心理的・社会的効果は多様であり、とりわけ人生の後半においては、動物が日々の生活を支える重要な存在となっていることを実感する人も少なくない。

高齢者にとって犬や猫などのペットと暮らすことの意義や、ペットとのよい関係のあり方を明らかにすることは、社会老年学における比較的新しい研究テーマの一つである。高齢期には、健康状態の変化や社会的役割の喪失、社会的孤立や孤独感が生じやすくなることなど、心身・社会両面での課題が顕在化しやすい。ペット飼育率の高い欧米では、こうした文脈のなかで高齢者とペットとの関係が早くから注目され、高齢者のペット飼育状況 (pet ownership) やペット飼育に関連する要因、さらにはペットとの暮らしが心身の健康に及ぼす影響について、多くの実証的研究が蓄積されてきた (安藤、2001, 2003; 安藤ら、2006)。

本論では、筆者と共同研究者が約30年にわたって取り組んできた「高齢者とペット」に関する研究に焦点をあてる。1990年代後半の安藤ら (1997) による高齢者のペット飼育に関する調査を起点に、2000年代のペットとの情緒的なつながりと精神的健康に関する研究、2010年代の高齢期におけるペトロスの分析を経て、近年では高齢者施設における動物との共生支援へと研究を発展させてきた (田島ら、2024)。これらの研究の軌跡を

概観することで、これからの高齢社会において、高齢者とペットがいかに関係を築き、支え合っていくことができるのかを展望したい。

2 地域在住高齢者における ペット飼育の実態

日本において「高齢者とペット」が社会老年学の研究テーマとして登場したのは1990年代後半である。当時の研究の関心は、まず「高齢者はどのような環境で動物を飼育し、そこにどのような意味を見出しているのか」という実態把握にあった。

こうした問題意識にもとづき行われた代表的な調査研究の一つが、安藤ら (1997) であり、東京都世田谷区 (大都市部) と山形県米沢市 (地方都市) の高齢者882人の回答を分析した。ペットの飼育率は、住宅事情や屋外飼育のしやすさから米沢市 (34.9%) が世田谷区 (22.2%) を大きく上回った。しかし、本研究が明らかにした重要な知見は、「ペットとの交流の質」における地域差であった。ペット (犬・猫) との情緒的一体感がある者の比率は、米沢市43.5%に対し、世田谷区では75.6%と有意に高かったのである (図1)。大都市部においては、ペットはもはや「番犬」や「屋外で飼う生き物」という位置づけではなく、核家族化が進む家庭内において「情緒的なつながり」の対象として認識されていた。この初期データは、都市化という社会的変容が、人と動物の関係性をより親密で家族代替的なものへと変容させたことを実証的に示したものと見える。

3 ペットとの情緒的なつながりと 精神的健康

2000年代に入ると、研究は「ペットとの暮らしが高齢者の精神的健康にどのような影響を及ぼすか」という方

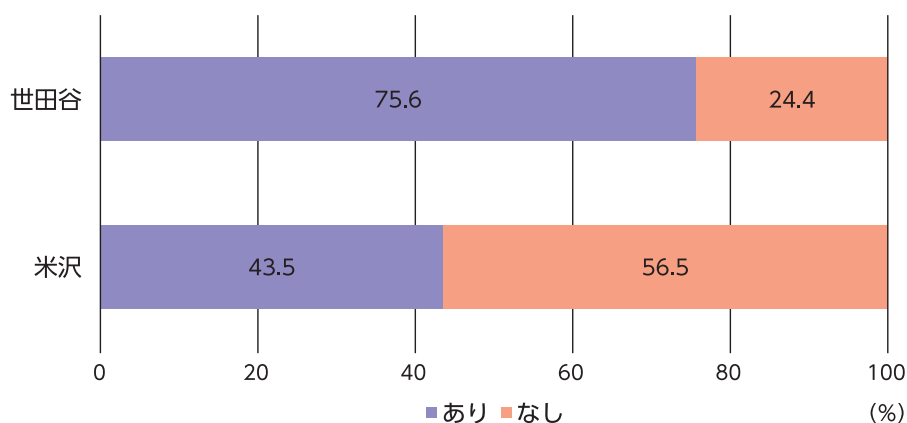


図1 ペットとの情緒的一体感がある者の割合 (犬猫群)
(出典: 参考文献1)

向へと進んでいく。安藤・児玉 (1998) の中高年を対象とした予備的な研究を受けて、安藤 (2008) は、60～74歳の男女600人を対象とする郵送法による調査から、ペットとの情緒的関係が親密な者ほど抑うつ傾向が弱く、孤独感も低いという結果を報告している (図2)。

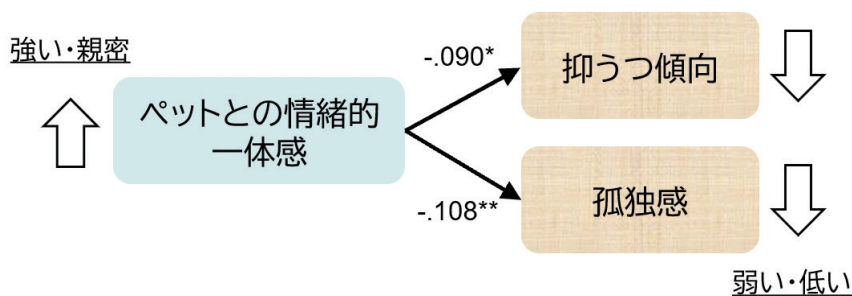
この研究のポイントは、飼い主とペットの関係をペットとの情緒的交流という、いわゆる愛着の観点で評価し、その多寡により精神的健康に違いがあるかを検証している点にある。欧米の研究では、ペットを飼育しているだけでは心身への影響は見られず、ペットとの関係性 (愛着関係: attachment) を考慮することにより、ペットの影響が的確に捉えられることが明らかにされていた。ペットとの関係性を評価する指標は、この研究が実施された時点ですでに複数の尺度が開発され、その一部は日本語に翻案されて信頼性や妥当性が確認されたものもあった (安藤, 1999a; 1999b)。しかし、質問項目数が多かったり、日本の状況に適さない内容であったりなど、一般の人たちを対象とする調査には使いづらいものであった。

そこで、新たに6項目で構成される「ペットとの情緒的一体感尺度」(表) を作成し、その信頼性と妥当性を検証した上で、ペットとの情緒的交流が高齢者の精神的健康に及ぼす影響を検討した。

加えて、もう一つのこの研究のポイントは、浅川・安藤 (1998) の高齢期における社会関係についての研究から、高齢期の精神的健康にとっては、親密性に基づく関係を多く形成・維持することが必要であるとの知見をベースにしている点である。つまり、高齢期においては、人との関係だけでなく、ペットとの関係においても、親密な関係を形成・維持することが高齢者の精神的健康に寄与することを明らかにした。

4 高齢期のペトロス

高齢者が多くなった現在、高齢の飼い主が高齢のペットと生活することも珍しいことではない。高齢者がペットと暮らす上での最大の障壁は、自身の健康不安と、ペット



注) 基本属性、社会関係、ペット飼育に関する変数を統制した重回帰分析の結果。
数値は標準偏回帰係数。* $p < .05$ ** $p < .01$

図2 ペットとの情緒的一体感が精神的健康に及ぼす影響
(出典: 参考文献9)

表 ペットとの情緒的一体感尺度

ペットとあなたは、日頃どのような関係にありますか。それぞれについて「あてはまらない」から「あてはまる」の4つの中から1つ選んで教えてください。

	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
Q1. ペットと何となく気持ちが通じる	1	2	3	4
Q2. ペットと一緒にいると、ほっとする	1	2	3	4
Q3. ペットは私を幸せな気分してくれる	1	2	3	4
Q4. ペットは私のことをよく理解している	1	2	3	4
Q5. ペットがそばにいないと、さびしいと感じる	1	2	3	4
Q6. ペットは私を元気づけてくれる	1	2	3	4

注1) Q5は逆転項目。

注2) 単純加算して合計得点を算出。得点範囲は6～24点。得点が高いほどペットとの情緒的一体感が強いことを示す。

(出典：参考文献9)

との死別（ペットロス）に対する不安である。長い時間を共にしたペットが亡くなった時に、高齢の飼い主はどのようなプロセスを経て日常の生活に戻っていくのだろうか。

二階堂・安藤（2015）では、ペットロスという事態への適応プロセスを質的データに基づき分析した。ペットとの死別を経験した高齢者へのインタビュー調査から、亡くなったペットに対して、火葬・納骨などの儀式を行い、供花する、写真に話しかけるなどの行為が見られた。これらの行為は、亡くなった対象を切り離すのではなく、心の中で新たな形で「継続する絆（continuing bond）」を再構築するという悲嘆への適応プロセスであった。動物との関係を「終わった過去」ではなく「共にあり続ける現在」として絆を再構築し、自身の人生の中で物語化することが、高齢者の心理的レジリエンス（回復力）を支える鍵となっていた。

二階堂・安藤（2021）は、犬を亡くした経験の後、新たに犬を飼っているグループと飼っていないグループの違いについて、質的データに基づいて分析した。当然のことながら、犬がいる生活の再開が明確な相違点であった。犬はどのような犬種でも散歩が必要な動物である。これが飼い主にとって大きな生活習慣の変化を促すのだが、亡くすと、逆にその日常が消失する。このことは飼い主の心身への影響が大きいと考えられる。これまで、ペットロスの予防的な措置として新しく犬を迎えることや、多頭飼育を勧める意見が散見されるが、その理由としては新たな犬の存在が飼い主の悲嘆を慰撫してくれることを期待するものであり、生活習慣としての犬の

飼育に関してはほとんど触れられてこなかった。犬を亡くした後に再び犬との生活を選んだ飼い主は、「犬のいる日常」に復帰することにより、悲嘆が重くならずすんでいるのかもしれない。このように、高齢期のペットロスへの適応には、内面的な絆の再構築と生活習慣の維持という両輪が重要であるといえる。

5 介護老人福祉施設における「組織的共生」の実践

現在、筆者と新たな共同研究者は地域在住の高齢者から高齢者施設へと研究対象をシフトしている。最新の論文である田島ら（2024）は、神奈川県にある全国でも珍しい伴侶動物との同伴入居を認めているA施設での質的データに基づく研究である。この施設における動物との共生は、単に一緒に入所することだけではなく、組織的な動物への支援が整えられており、理論記述をもとに、次のような支援方法の特徴が明らかになった。

- ①集団生活の規律と動物のニーズの両立：施設という集団生活の場所において、ペットの鳴き声や排泄トラブルの防止とストレス管理をいかに両立させるかという課題。
- ②スタッフによる「代理ケア」の組織化：高齢の飼い主が行えなくなった餌やりや清掃、散歩などのケアを、スタッフが「業務の一部」として代行する仕組み。
- ③動物を「スタッフの一員」とする認識：動物が他の入居者に対して癒やしや生活意欲を引き出す役割を担っているという共通認識。

④看取りの支援：飼い主とペット、どちらが先に亡くなっても、その絆を最後まで尊重する姿勢。

このように、単なる場所の共有を超えた組織的な体制があるからこそ、この施設における動物は、生活環境そのものを構成する「共生のパートナー」として位置づけられているといえる。

6 今後の研究課題

今後の日本においては、健康寿命の伸長、社会的孤立の解消、孤独感の軽減など、高齢者の心身の健康の維持・向上が重要な課題になる。ペットとの生活は高齢者の心身の健康維持・向上に寄与することが明らかにされてきており、このような成果を高齢者の生活に取り入れることにより、社会との関わりを維持して、自立して活動できる期間を長くし、サクセスフル・エイジング（幸福な老い）へとつなげていける。こうした課題を克服し、動物との共生を社会のレジリエンスとして具体化するためには、以下の3つの方向性が重要となる。

第一に、「多層的な共生支援構造」の実装である。独居高齢者が安心してペットと暮らせるよう、自治体、地域のボランティアやNPO・市民団体、獣医師・愛玩動物看護師、保健・福祉職、介護サービス事業者、さらにはペット関連企業や地域住民などが連携するモデルを社会システムとして構築する必要がある。第二に、「双方向のウェルビーイング」の追求である。高齢者の「癒やし」のために動物を消費するのではなく、動物側の幸福（アニマル・ウェルフェア）を科学的に評価し、双方が満たされる条件を確立する必要がある。第三に、「役割の再編」による自己有用感の確立、すなわち、高齢者が「支えられる側」という固定的な考え方にとらわれず、動物をケアし、見守る「主体」として生活できる環境をデザインすることが、認知症予防や心身の健康維持につながることをさらに実証していくべきである。

7 おわりに

筆者と共同研究者による約30年の研究の軌跡は、動物を「個人の所有物」から「社会の構成員（伴侶）」へと引き上げるプロセスであった。ペットの位置づけの差異

の発見から始まった探求は、今や施設・病院という公的な空間での「組織的共生」という新たな段階へと深化を遂げつつある。高齢者が尊厳を保ち、その人らしく生き続けることのできる社会。それは、人間同士の絆を編み直すだけでなく、人と動物、そして社会が互いに支え合う「多層的な共生支援の関係性」を構築することで実現されるだろう。私たちは今、互恵的な絆を未来の共生社会のあり方の中に組み込んでいくことが求められているのかもしれない。

【参考文献】

1. 安藤孝敏・古谷野巨・児玉好信・浅川達人(1997). 地域老人におけるペット所有状況とペットとの交流 老年社会科学、19(1),60-75.
2. 浅川達人・安藤孝敏(1998). 高齢者の情緒的一体感に関する研究 東海大学健康科学部紀要、4,25-29.
3. 安藤孝敏・児玉好信(1998). ペットが中高年の精神健康に及ぼす影響 どうぶつと人、6,21-25.
4. 安藤孝敏(1999a). 人とペットとの関係を評価する尺度；(その1) プロペット、145,58-61.
5. 安藤孝敏(1999b). 人とペットとの関係を評価する尺度；(その2) プロペット、146,60-64.
6. 安藤孝敏(2001). 高齢者とペット動物 老年社会科学、23(1),25-30.
7. 安藤孝敏(2003). 高齢者とペットとの関係 桜井富士郎・長田久雄(編著)「人と動物の関係」の学び方：ヒューマン・アニマル・ボンド研究って何だろう(pp.193-201) インターズー
8. ガンター,B. 安藤孝敏・種市康太郎・金児恵(訳)(2006). ペットと生きる：人とペットの心理学 北大路書房.
9. 安藤孝敏(2008). ペットとの情緒的交流が高齢者の精神的健康に及ぼす影響 横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ(社会科学)、10,1-10.
10. 二階堂千絵・安藤孝敏(2015). ペットと死別した高齢者の適応を支えたもの：死別したペットとのContinuing Bondに着目して 技術マネジメント研究、20,13-22.
11. 二階堂千絵・安藤孝敏(2021). 高齢期におけるペットロス：適応プロセスに注目して 技術マネジメント研究、20,40-49.
12. 田島明子・安藤孝敏・押野修司・安野舞子(2024). 介護老人福祉施設における高齢者と伴侶動物の共生のための動物(犬・猫)への支援方法：質的データ分析手法SCATを通して ヒトと動物の関係学会誌、69,84-91.